
魔法少女リリカルなのはStriker'S 正義の味方と魔法使い~

night

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStriker's 正義の味方と魔法使い

【Nコード】

N3822L

【作者名】

night

【あらすじ】

正義の味方という理想を目指して戦い続けた愚者、衛宮士郎。自分の理想を貫き、戦い続けたがその夢なかばに倒れてしまう。だが、士郎はそこで、かつて聖杯戦争を共に戦い抜いた最愛のパートナー、遠坂凜と出会う。そして、正義の味方は平行世界に飛ばされる。魔法使いはそこで魔法使い出会う。魔術と魔法が交わるとき物語は始まる。これはFate/staynightと魔法少女リリカルなのはStriker'sのクロスオーバー作品です。作者はこれ

が初作品なので何卒ご容赦ください。 >
<

プロローグ

プロローグ

体は剣で出来ている

「 I am the bone of my sword .

血潮は鉄で心は硝子

「 Steel is my body , and fire
is my blood .

幾たびの戦場を越えて不敗

「 I have created over a thou
sand blades .

ただ一度の敗走もなく、

Unaware of loss .

ただ一度の勝利もなし

「 Not aware of gain

担い手はここに独り。

「 With stood pain to create
weapons .

剣の丘で鉄を鍛つ

「 waiting for one's arrival .

ならば、我が生涯に意味は不要ず

「 I have no regrets. This is t
he only path」

この体は、無限の剣で出来ていた

「 My whole life was “ unlimit
ed blade works”」

第一話 　　く旅立ちの日々（前書き）

この作品はFateとリリカルなのはのクロスオーバー作品です。作者はこれが初なので、設定や登場キャラの性格や口調がおかしいと思いますが、どうか勘弁してください。それでもこの作品を読んでくれる方に最大限の感謝の気持ちを……

第一話 旅立ちの日

～ 士郎 s i d ～

衛宮士郎は死にかけていた

封印指定を受けてからの魔術協会からの刺客や協会代行者の襲撃。自分の理想を貫き続けた結果。生きているのが不思議なほどに傷ついていた。体の至る所には裂傷ができ、そこから血があふれていた。身に纏った赤い聖骸布は、もはや機能しないほどに至る所が破れ、ちぎれていた。

6

「どつちやらどこまでか」

座り込んだ衛宮士郎は自分の体を確認してつぶやいた。

自分の周りには協会の代行者や、魔術協会の刺客などの遺体がたおれている。

回りの木はパチパチと音をたてて燃え続け、地面にはクレーターや、割れているところがある。

それだけ協会の代行者や魔術協会の刺客との戦いは激しかった。

戦う前から死徒との戦いによる疲労や、代行者や刺客の襲撃のせいで十分に寝れないことよって極限状態にあつた。全身は裂傷で血にまみれ、左手は火傷を負い、右手は動かず、足は変な方向に曲がり、視界はぼやけていた。

そのとき、人の気配が自分に近続いてきた。

この辺りに一般人はこない。

だからこそここを戦場に選んだのだから。

「俺もどうやらここまでの様だな、俺は自分のしてきたことに後悔はない。

ここで死ぬのも理解できるが、約束があるのでな……最後まで足掻かせてもらうぞ。」

「足掻くのもいいけど、約束はちゃんと守りなさいよ。」

その声を聞きぼやけている視界をこらして見ると、そこにはかつて聖杯戦争を共に戦った最愛のパートナーがいた。

「久しぶりね士郎。」

「遠坂どうして……と聞くまでも無いな。」

男はクツと笑い皮肉げに尋ねた。

「あなたの考えているとおり私は協会からの命を受けてあなたを捕まえにきたわ……建前はね。」

「建前とはどうゆう事かな？」

俺は幾つかの選択肢を頭に思い浮かべながら聞き返した。

「士郎にはあの件で借りがあるしね。助けにきたのよ。」

あの件とは、以前俺が遠坂に頼まれて宝石剣を投影したことだ。

遠坂の頭の中にある記憶だけで投影した結果……かろうじて成功。

宝石剣の強度は、数回使えば粉々になるほどだ。

俺は、あの赤い弓兵の記憶の一部を受け継いでいて数週間寝込む程度で済んだ。

「けれど、そんなことをしてばれたら遠坂もただじゃすまないぞ。」

「大丈夫よ。そのためにいろいろ準備してきたもの。」

そう言つて遠坂は、後ろから棺桶の様なものを取り出した。

「今から士郎にはこの中に入ってる人形に魂を移してもらおうわ。」

もちろんあなたの体と同じ青崎製のやつだから安心して。」

棺桶の中からは俺そっくりの人形がでてきた。

「……なんとなく、遠坂のやろうとしてる事がわかったよ。」

「遠坂は俺の魂をこの人形に移して、元の肉体を協会にもっていくつもりだ。」

「時間が無いからさっさとやるわよ。士郎目を瞑って。」

「ああ、わかった。」

そう言って目を瞑ると、若干まぶたの向こうがひかり魔術によって人形に魂を移し終わって目を開けてみると視線が若干低いことに気続いた。

「それじゃ、送るわね士郎。ちゃんと次の世界では幸せになりなさいよ。」

そういって遠坂は、手に持った宝石剣魔力をこめ始めた。

「ああ、遠坂。最後まで俺に付き合ってくれてありがとう。遠坂も元気でな」

そう言った直後に遠坂の手に持った宝石剣から光があふれ出して視界を白一色に染めた。

そして衛宮士郎は光に飲み込まれこの世界から消えた……。

第一話　く旅立ちの日く（後書き）

ども、ナイトツす。初めから口調やら性格がおかしいですね・・・
。作者は作者なりにかんばりますのでどうか許してください。

第二話 出会い 01 (改)

「……………」

衝撃と共に俺は目を覚ました。

どうやら俺は仰向けにねていたようだ。

「ここは、どこだ……………」

風が木や、草の匂いを運んでくるのがわかる。目を覚まして辺りを見回すと匂いや、風景から

どこかの森の中にいるのがわかった。

「俺はたしか……………」

そう言つて直前の記憶を思い出すと自分が平行世界に送られたのがわかった。

自分の体を見ると、地面に寝ていたことよって少し汚れていたがそれ以外は何にもなく、ほっといたらすぐに死ぬような怪我も治っていて、聖骸布とボディーマーも直っていた。

「そうか、俺は平行世界に送られたのか……………」

平行世界に送られたことによってここがどこか、ここで使用されている言葉などもわからず、誰かを探す必要があった。

「会話は、大概の外国語を簡単に話す程度には習得しているから通じると思うが……」

正義の味方と言う理想を目指す以上、会話を習得するのは必要不可欠だったため

必至にいろんな言葉を学んだ。

学んだのはそれだけでは無いが……とにかくこの努力によって、会話は大丈夫と考えた。

並行世界ということで、使われている言葉が違うと言う不安が残るが。

「よし、行くか。」

そう言って衛宮士郎は立ち上がり森が開けているほうへ歩きだそう

とした。

そしてさつきから感じる違和感に気づいた。目線が低くなっている。

自分の肌を見てみると、肌が褐色から聖杯戦争のときの色に戻っていた。

肌だけでなく、髪の色も昔の赤茶に戻っていた。川があつたので自分の姿を確認すると、想像どおりかつての自分の姿があつた。

「なんでさ。」

今ではほとんど使わなくなったなつかしい口癖が思わず口から洩れた。

考えられる可能性は一つ。人形に魂を移したからか、遠坂のうつかりしかなかった。

遠坂はいつも大事なところでうつかりをしてしまったため、こうなったのかもしれない。

中はどうなったか気になり調べてみることにした。

「同調・開始<トレース・オン>」

肉体年齢 - - - 15歳。

身体機能 - - - 正常。ただし性能が50%増大

精神状態 - - - 正常。

魔術回路 - - - 二十七本稼働。魔力50%増大

本体機能 - - - 正常。但し一部に異常あり。

固有結界 - - - 正常。任意発動可能。

投影 - - - 正常。武器、防具及び宝具投影可能。宝具の真名開放可能。

武器・防具及び宝具以外の投影は魔力消費量が多少大きいが可能。

身体機能、魔力以外は以前と変わらないままだ。魔力や身体機能は蒼崎製の人形の恩恵だろう。

人形本体に、一部異常があるが少し違和感を感じる程度だから大丈夫だろう。

森を少し歩くと道を見つけ道沿いに歩いていくと、東の空が赤く染まっているのがわかった。

そして、その方向からは消防車や救急車らしき音が聞こえてきた。いやな予感がして全身に強化をかけて急いで向かうとそこには、紅い炎が燃え上がり、

至る所が今にも崩れそうな建物があった。その周辺にはレスキュー隊らしき人たちがいた、

そのやや後ろの方に司令官らしき人物が指示をだしている。

それを見た瞬間、衛宮士郎は全力で指揮官らしき人物へ向かった。

）士郎 side end（

くゲンヤsideく

くそ！なんてこった。せつかくスバルとギンガが遊びに来てたって言うのに、まさかこんなことが起きるなんて。

「おい！救助隊はまだか！」

「はいっ、あと少しで到着と連絡を受けています。」

近くにいた補佐が答える。

「つーことは、まだ中に取り残されてるってのか。」

スバルやギンガ、まだまだ中には何人かの民間人が残されている。自分の娘が目の前で助けを求めているのに、助けられず悔しさが募る。誰か、あいつらを助けてやってくれ。

「あなたがここの司令官かね？」

後ろから聞きなれない声が聞こえてきた。

後ろを振り向くと、身長は165〜170くらいで、髪の色は赤茶色。

着ているのは紅い外套？に、黒いボディーアーマーという格好だ。

BJだろうか？

「そうだが・・・あんたは誰だ？」

俺は警戒しながらその男に質問した。

「ふむ、私のことはアーチャーとでも呼んでくれ。」

そう言って目の前の男は簡単な自己紹介を言った。

「アーチャーね。俺はゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。ここで臨時に指示を出している。」

「アーチャーは何しにここにきたんだ？見たところ、管理局の人ではないようだが・・・」

管理局の人間ならばアーチャーなどと偽名を使わず、自分の所属と階級をまず言うだろう。

「なに、私は歩いていたら遠くからこの現場が見えたので私に手伝える事が無いか聞きに来たまでだ。

そんなことより、この建物の中にはまだ人が残されているのか？」

そう言ってアーチャーは真剣な表情になって聞いてきた。

「いや、一般市民に手伝わせるわけにはいかねえよ。こいつは俺たちの仕事だ。」

「そのことなら心配ない。私は一般市民なんかでないからな。それより、中には人がいるのか？」

「ああ、まだ中には残されている人たちがいる。そんな中には、俺の娘たちもいる。」

せっかく俺に会いに来てくれたのにな。」

俺はそう言って皮肉げに笑うとアーチャーはこう言ってきた。

「そうか、では安心するといいい中に残されている人もあなたの娘も全員救い出して見せよう。」

アーチャーは建物のほうを見ながらこう言ってきた。

「何言ってるやがる。魔導士でもないお前に何ができる!」

俺は目の前の娘を救えない苛立ちで、アーチャーに怒鳴ってしまった。

「ああ、確かに。私は魔導士などと言う者ではないが……私は正義の味方なのでな。」

目の前に救える命があるのなら、そのすべてを救って見せよう。

アーチャーはそう言って建物の方にもものすごい速度で走っていった……

〜ゲンヤend〜

なにかの災害現場を見ることは珍しいことではなかったが、今回の規模が違った。辺り一面が赤く染まり、中の建物は崩れかけていた。ここから見えるだけでいたる所にけが人が見える。

俺はその現場のやや後ろの方に司令官らしき人物がいるのを見つけた。

俺は全身に強化をかけ、全力でその司令官らしき者へ向かった。近続くと、その人物が辺りの人に指示を出していることから、この現場の司令官だとわかった。

「あなたがここの司令官かね？」

後ろから声をかけてみるとその人はこちらを向いて少し警戒しながら聞いてきた。

「そうだが・・・あんたは誰だ？」

こうゆう場面では、きにいらぬがあいつの口調で話す方がいいこともあり、この口調を使っている。

いつの間にかあいつと同じ口調になっていそいでこわいが……

「ああ、私のことはアーチャーとでも呼んでくれ。」

そついうと目の前の男性は警戒しながら言ってきた。

「アーチャーね。俺はゲンヤ・ナカジマ三等陸佐。ここで臨時に指示を出している。」

ふむ、アーチャーじゃまずかったか？まあいいだろ。

「アーチャーは何しにここにきたんだ？見たところ、管理局の人ではないようだが……」

俺は念のために確認した。もしこの人が司令官ではなかったのなら、司令官の所へつたえてほしいからな。しかし、管理局とはなんだろう？

今までいろんな所を回ってきたけど、そんな組織は聞いたことがない。

もしかしてこの世界特有の組織なのだろうか？

俺は詳しく管理局について聞きたかったが今はそんな暇はなかったので放っておいた。

「なに、私は歩いていたら遠くからこの現場が見えたので私に手伝える事が無いか聞きに来たまでだ。

そんなことより、この建物の中にはまだ人が残されているのか？」

俺が一番気になることを聞いた。もし中に人がまだ取り残されているのなら、今すぐにでも

その人たちを救いに行かなければならない。

俺は今までより真剣に聞くと、それを察してくれたのか真剣にこたえてくれた。

「いや、一般市民に手伝わせるわけにはいかねえよ。こいつは俺たちの仕事だ。」

「そのことなら心配ない。私は一般市民なんかでないからな。それより、中には人がいるのか？」

「ああ、まだ中には残されている人たちがいる。そんな中には、俺の娘たちもいる。」

せっかく俺に会いに来てくれたのにな。」

そう、ゲンヤさんは皮肉げに言った。それを聞いて俺は自分の体に強化をする準備を

はじめた。

「そうか、では安心するといいい中に残されている人もあなたの娘も全員救い出して見せよう。」

俺は建物のほうを見ながらこう言った。

「何言ってるやがる。魔導士でもないお前に何ができる!！」

ゲンヤさんは目の前に娘にいてすぐに救えない苛立ちからか、今までにないくらい大声で言った。

「ああ、確かに。私は魔導士などと言う者ではないが………私は正義の味方なのでナ。」

目の前に救える命があるのなら、そのすべてを救って見せよう。」

ああそうだ、確かに俺は魔導士とは何か知らないがそんなものではない。

俺は正義の味方なのだ。決してあいつなんか見たいになつてたまるか。目の前に助けを待っている人がいるのなら、俺はその人たちを全力で救って見せるだけだ。

そうやって俺は全身に強化の魔術をかけ、風のごとく走りだした。

）士郎 e n d ）

第二話 〓出会い 〓〓 (改) (後書き)

ども、更新がほほできない作者です。感想とか書いてくれるとうれしいです。

第三話 ㄥ 出会い 魔術師と魔法使い

ㄥ 士郎 side ㄥ

「建物の中に入ったはいいが・・・」

俺はゲンヤさんと話してからすぐに走りだした。燃え盛る建物の中に入り、

いざ探そうとして気続いた事があった。そう、要救助者の場所を聞き忘れていたのだ。

「は、遠坂のうっかりがうつったのか？」

俺はそんな事を言いつつとにかく前に進む事にした。

そう進んでいると前方にレスキュー隊の服を着ている人たちが数人いるのに気続いた。

俺はどこに要救助者がいるのかその人たちに聞くことにした。

「すまないが、この先に要救助者がいるのかね？」

救助隊の人は俺を見てびっくりしていた。どうしたのだろうか？

まあ今はどうだっていい。必要最低限なことしか言わないが今は緊急時だ仕方がないだろう。

「誰だあんた、本局の魔導士か？」

手に持ったホースから水を出しながら聞いてきた。

「ああ、そうだ。」

本当は違っただが、今はこう答えたほうがいいだろう。

そう答えると俺に聞いてきた人は納得したようにうなずいた。

「そうか、この先に子供が取り残されているんだ。頼む子供を助けてやってくれ。」

「もちろんだ。」

俺はそれを聞き再度体中に強化をかけて風のごとく走りだした。走っていると以前の体の感覚と今が僅かに違うことに気続いた。強化を使っている肉体が今までより魔力伝導率が高く、以前より強度が増している。

周りの炎が俺を焼こうとするが、その場所をそれ以上の速度で駆け抜ける。

幸い周りの熱や火の粉は強化による肉体硬化と、自身が纏っている風で気にはならない。

そうして走っていると目の前に扉が見え、そこから出ると広げた場所に出た。

おそらくここが広場なのだろう。俺は誰かいないか呼びかけようとしたところで

目の前に広場の中心位に置いてある像が倒れて、

その下にいる少女を今にも押しつぶそうとしている光景が目に入った。

「
トリース
投影、開始」

俺はその光景を見た瞬間、反射的にそうつぶやいてジャンプし、手に黒鍵を投影し鉄甲作用をつけて投げる。その数8つ
女の子を押しつぶそうとしていた石像は黒鍵によって吹き飛ばされた。

俺は目の前の女の子の前に着地した。

「大丈夫か？」

「うん。」

「そうかよかった。私の名は衛宮士郎、君は？」

「スバル……ナカジマ。」

「ではスバル、もう安心していいぞすぐにお父さんの所に返してやるから。」

「あのっ！」

俺はそう言っ外に出るルートを探していると、空から魔法使いが着ていそうな服を着て、手に魔法のステキらしき物を持った女性が降りてきた。

その女性を見た瞬間「凄いです！本物の魔法少女ですよ！」なんてどこかの愉快型魔術礼装の声が聞こえた気がしたが気のせいだ、気のせいだと信じたい。

〈士郎end〉

〈なのはside〉

私とフェイトちゃんは、はやてちゃんの研修先へ遊びに行く予定だったんだけど……
近くにある空港で起きた大規模火災がおきて、災害担当局員だけでは対応しきれず、近隣の陸士部隊や航空隊が緊急収集されるほどだった。

「もう少し、あと少しだからがんばってレイジンハート。」
> ok、マイマスター <

私は手の中にある長年一緒だった相棒を握り締めて目的地の広場まで飛んだ。

ようやく狭い通路をぬけて広い広間に行くと、目の前に今にも像の下敷きになりそうな女の子がいた。

「レイジングハート！」
< マスター！ >

「えっ？」

私は足元に魔方陣を展開させてバインドで像を受け止めようとしたら……

ビュン！と風切り音と共に8つの影が石像を吹き飛ばした。

私は像を吹き飛ばした影が飛んできうほうを見るとそこには赤いコートのようなのを羽織り、中に黒い鎧をきた男の人がいた。赤いコートがBJで、手に持っているのがデバイスなのかな？

こんな場所にいるから一般人ではないようだけど……

「あのっ！」

私はその男の人が気になっていつの間にか声をかけていた。

〈なのは end〉

〈三人称 side〉

「あのっ！」

「ん？」

倒れてきた像を吹き飛ばして女の子を救おうとしたら声がかげられて、その方向を向くと宙に飛んでいる

いかにも魔法使いがきていそうな者を着て、手にステッキを持った女性がいた。

「私は時空管理局所属、高町なのはです。貴方は誰ですか？」

「私は協力者のアーチャーだ。聞きたいことがあるだろうが今は後だ。要救助者の一人スバル・ナカジマを確保した。外に出るルートはあるか？」

「はい、レイジングハート」

<ここから天井を突き破り出た方が早いかと。>

「分かった。それで行こう。」

「大丈夫ですか。」

「問題ない。投影・開始<トレース・オン>」

そう言っただけでエミヤは手に黒い弓と捻れた剣を投影した。その答えを聞いたのはは魔力砲のチャージを始めた。

第三話 〽出会い 魔術師と魔法使い〽 (後書き)

キャラの口調とデバイスがわかりませんがとりあえず書けました。
また変えると思いますが、今はどうか勘弁を。
とにかく眠いです……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3822/>

魔法少女リリカルなのはStriker'S 正義の味方と魔法使い～

2011年2月21日18時35分発行